こんなドラクエ8は嫌だ！

賀楽多屋

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

深夜一本勝負第二弾。※これは、某実況者様をモデルとしたキャラクターとＤＱ８のクロスオーバーとなります。２．５次元作品となりますので、もし何か問題があれば直ぐに取り下げます。

〈以下あらすじ〉サーベルト決戦シーンに割り込んだチワワと食害。テメェら全員死ねとばかりにドルマゲスにロックオンされたので、三人は共闘することに。気が向いたら、続編として不人気ＶＳゼシカ。宇宙人と小人が修道院の兄弟喧嘩眺めたり、バイと外道がアスカンタの王様にお酒を強要したりみたいな話を書くかもしれません。

目　次

こんなドラクエ８は嫌だ！ ―――――――― 1

こんなドラクエ８は嫌だ！

「なんで、リーザス塔が開いているんだ……？」
　リーザス村の名主の跡取りであるサーベルトは、妹のゼシカと村の外へ買い物をしている帰りに、一年に一度しか開かれないはずのリーザス塔の扉が開いていることに不信感を抱いた。
　歩みを止めてリーザス塔を凝視する兄に、並んで歩いていたゼシカも揃って足を止める。兄の独白に導かれるようにしてゼシカもリーザス塔の方へと顔を向けると、ぐずついていた空がピカリと光った。
「本当だわ……。でも、なんだかすごく嫌な予感がする」
　今にも走ってその疑問を突き止めたそうな兄の精悍な横顔に、ゼシカが彼の袖を掴んで阻止しようとするも、伸ばした手は虚しく宙に漂う。
「サーベルト兄さん、一旦村へ――――」
「ゼシカ、お前は村に戻ってこのことを皆に伝えに行ってくれ。私は、賊が忍び込んだのか様子を見てくる！」
　サーベルトは身軽くその場から駆け出し、顔だけはゼシカに向けて村への伝言を頼む。彼の行く先では、不吉にも一筋の雷が迸った。
「待って！　兄さん!!」
　――――行かないで！　今行ってしまったら、もう会えなくなってしまうような気がするのに……!!
　しかし、ゼシカのそんな願いも虚しく、サーベルトは腰に差している銅の剣を片手で叩いて大丈夫だと言うように微笑む。リーザス村一の剣豪であるサーベルトは、そこらの賊相手にやられるような男じゃないことは、妹だからこそ分かっている。
　だが、それでも。
　今日ばかりは、嫌な予感がゼシカに付き纏う。お供に自分も連れて行ってくれと叫びたいが、恐らく勇敢な彼女の兄はそれを許しはしないだろう。
　村の中では誰よりも上手く魔法を使うゼシカであったとしても、彼女はまだ魔法使いの卵でしかないのだ。

サーベルトが賊と鉢合う前に、応援を呼ぼう。
ゼシカは、その場に突っ立って兄の去り行く後ろ姿を未練がましく見つめることをやめて、故郷の村へと駆け出した。膝下まであるスカートが足元に付き纏って非常に邪魔でしかないので、両手でたくし上げる。これで走りやすくなった。
村までの道中で遭遇する魔物達を一掃しながら、ゼシカは村までひた走る。

☆☆√

リーザス塔の出入口は、この観音扉一つしかない。よって、塔に侵入するには、観音扉からしか入れないのだが、これにはちょっとしたカラクリが施されており、村の者でしか開けることは出来ない作りとなっている。
リーザス塔が開放されるのは、一年に一度行われる村の祭りの時だけだ。この塔には、村の開拓者達の墓があり、最上階にはサーベルト達の先祖が眠る女神像がある。
そのため、彼岸になると、彼等の鎮魂を願って皆塔へと足を運び、花や菓子を備えるのだ。不思議なことにその祭りの時だけは、塔内に蔓延る魔物達は出ず、神聖な空気で満たされるので、力無き子どもや老人達も参詣することが出来る。
リーザス塔は、リーザス村の住人にとっては冒されてはならない神聖な場所であるため、出入口のみならず、塔内には至る所に仕掛けが施されている。
アルバート家に伝わる書によれば、この塔自体が女神像を作成した先祖によって建造されたらしいが、そもそもどうして自ら墓場を建てたのかは謎だ。
もしかしたら、その先祖としては、この塔を墓以外の別目的で建てたのかもしれないな――――そんな風なことをサーベルトが登りながら考えていると、あっという間に最上階に辿り着く。
リーザス塔の最上階は、展望台のような作りになっている。

緩やかな階の先に、花々に囲まれるようにして立っている女神像は、慈愛の象徴であることを示すように嫋やかに両手を広げている。
純白と花々ばかりが占めるこの空間は、正しく聖地と呼ぶべき場所だろう。階下とは、明らかに流れる空気が違う。
しかし、そんな清浄な空間に一つ、禍々しいナニカが紛れ込んでいた。
ただ、そのナニカが見当たらず、サーベルトは周囲を警戒するように辺りを見渡す。
一通り身終わったあと、もう一度正面へ向き直ると、女神像の前で佇む長い銀色の髪を背中に流す男がいた。紫を基調とした道化師のような格好をしており、右手には気味の悪い造形をした杖が握られている。見ていると気分が悪くなってくるようだ。
あまりの男の邪悪さに、自然と腰に差していた銅の剣へと手が伸びる。
「……だ、誰だ!?　貴様は……!」
「……悲しいな」
返ってきたのは意味の分からない言葉だ。
明らかに常人ではない道化師の得体の知れなさに、サーベルトは再度鋭く誰何する。
すると、伏せられた瞼がゆっくりと上がった。面長の顔がサーベルトの顔を見た瞬間にニヤリと喜色を浮かべる。彼の握っている杖がその気持ちの昂りに反応するように邪悪に光った。
「くっくっく……。我が名は、ドルマゲス。ここで人生の儚さについて考えていた」
「ふ、ふざけるな!」
これ以上、この道化師と話していたら精神がやられてしまいそうだ。怖気の走る背中を無視して、手を添えていた銅剣を引き抜く――が、何故か銅剣は上手く鞘から引き抜けない。
「くっ……!?　どうしたことだ!?　剣が……剣が抜けぬ!!」
何度も何度も鞘から銅剣を抜こうと引っ張るが、不気味なことにビクともしない。サーベルトの顔いっぱいに冷や汗が流れ、心臓が壊れ

てしまいそうな程に高鳴っている。
ゆっくり、ゆっくりと己の傍に影の足音が忍び寄ってくるようだ。
ポタリと顎先から冷や汗が伝い落ちる。ギュッと冷たい手で心臓を鷲掴みされたような緊張感がさっきから身体中に張り詰めている。
たぶん、この足音は――――きっと死だ。
影の正体を察した瞬間、一瞬だけ視界から色が抜けた。
精神的に追い詰められているサーベルトを獲物を前にした蛇のような目で、舐めるように爪先から順繰りに見上げていく道化師――――ドルマゲスは塔内の宝物を狙った賊には見えない。
この男が――――そんなチャチなものを狙ってわざわざこんな所にやって来た筈がない。
刹那、空雷ばかりが鳴っていた外で、急にバケツをひっくり返しような大雨が降り始めた。ザアザアと地面に雨粒が叩きつけられる音が異様に大きく聞こえる。
「悲しいな……。君のその勇ましさに触れる度、悲しくなってくる」
雨音に混じって聞こえるドルマゲスの精神を逆撫でするような、甘やかな声が一音一音ゆっくりと落とされる。
その声に急かされるようにして、サーベルトは金属音を立てながら銅剣を引き抜こうと格闘するが、やはり1ミリも浮かない。早く早く!! 早く抜かなければ私は――――。

死んでしまう!

刹那、ドルマゲスがサーベルトに向かって手にしていた杖の先を向けた。禍々しく光る紫の光が零れるように杖先から溢れ出す。
それと同時に、女神像の真後ろで袈裟斬りしたような稲妻が雨雲に走った。目を焼くような光がサーベルトと、何事かと振り返ったドルマゲスを襲う。
どおんと地を揺らすような音と振動が二人の身を揺らした。どうやら、かなり近くで雷が落ちたようだ。
まともに見てしまったら失明してしまいそうな強烈な光のせいで、

暫く二人はその場で揃って立ち竦む羽目になった。サーベルトにとっては、致命傷になりそうな何かをドルマゲスによって仕掛けらそうになっていたから、運良く命を取り留めたようなものだ。
奴よりも早く目くらましから回復しようと、目をシパシパとサーベルトは瞬く。瞼の裏では、大量の星々が散っていた。
サーベルトが命を削るような思いで目を凝らしているれば、前方からドルマゲスとは違う聞いたことの無い声が耳に入ってきた。
「痛たたた……。なんやここ？　　通天閣か？」
「ちゃうやろ、シッマ。どう見てもこの女神像は、ビリケンさんと違うやろ」
「ホンマや！　　ビリケンさんと違って気品がある!!」
しかも、どうにも締まりのない声が二つだ。
意味の分からないことを耳慣れない方言で喋る男声からは、ドルマゲスのような邪悪さを感じない。
「ってか、なんやけったいな人おるやんけ！　　兄ちゃん、曲芸師か何かか？」
「……シッマ、言っとくけどこれ、ゲームちゃうで。現実やからな」
「……ホンマや。えらいリアルなグラフィックのゲームやなぁ思ってたら、ＰＣ無いやん。そういや。さっきまで俺らギスクラやってたんちゃうかったっけ？」
要領の得ない話ばかりをしている男達だが、恐らくドルマゲスと違って悪人では無いのだろう。彼等からは、殺気を感じない。只管、この状況に戸惑っているという風だ。
「せやで。でも、可笑しいことに俺らの装備とか格好は、マイ〇ラのまんまやな。ダイヤ剣とかクリー〇ーの服とか。シッマも金髪、赤白縦シャツやし」
やっとサーベルトが目くらましから立ち直る。そのことで、突如この危険な場に現れた二人の正体を目にすることが出来た。
「おっ！　　ってことは、俺の顔、本田〇祐か!?」
何故か「ほんまですねェ！」と変なイントネーションで喋り始めた男は、金髪の青年だ。半袖短パンという超軽装備で、魔物から一度攻

撃を受けたら大打撃を受けることだろう。腰からドルマゲスが持っている杖のような禍々しい弓を提げており、矢筒を背負っている。
「いや、それはちゃうわ。どっちかっていうと、立ち絵に近い感じ」
もう一人の男は、目元をパーカーのフードで覆った男だ。左手には青く輝く剣を握っている。かなり重量がありそうだが、容易く握りこんでいるため彼は見た目の細長さとは裏腹に、かなり鍛えているようだ。
突然の闖入者達に戸惑っているのは、サーベルトだけでは無い。先程まではニタニタと笑っていたドルマゲスでさえも困惑しているらしく。
「――――貴方達、何処から湧いて出てきました？　」
予定が狂ったとばかりに、忌々しそうに彼等を見やるその目は、面倒そうに細められている。
サーベルトと違って、この二人はドルマゲスに歓迎されていないのだろう。
「お前、湧いて出てくるって失礼やな！　　まぁ、確かに湧いて出てきたけどもな!!」
プンスコと、地団駄を踏むように分かりやすく怒りを顕にする金髪男。そんな彼と違って、パーカー姿の男は警戒するようにドルマゲスを見据える。
キャンキャンと子犬のように吠える金髪男に、ドルマゲスは小さく溜息を吐いて杖を再度構え直した。
「まぁ、良いでしょう――――仕方が無いので、纏めて殺してあげますよ!!」
ドルマゲスが言い終わらないうちに杖を振るう。杖先からあの紫の光がまた溢れ出たかと思えば、それは茨となり、先が三叉に分かれたかと思えば、三人の心臓を狙うように真っ直ぐに向かってくる。
「な、なんじゃこりゃぁあぁっ!!?」
金髪男の叫び声が最上階に轟いたかと思えば、音もなく三叉の茨が切り裂かれる。茨は切断された先から色を失い、灰へと還っていった。

「ぞ、ゾム……！　お前――――」
「ふーん！　こんなのじゃあ効かないぜ！」
二っと少年のように笑って、ダイヤ剣を一振りするゾムの足元では灰が舞っている。さっきの茨を切断したのは、フードの男だ。彼は、音速で茨を切断し、二人の危機を救ったのである。
「シッマ！　こ、ここゲームみたいに動き回れるわ！　腰に付いているその弓であの道化師牽制してくれへんか!!」
「ゆ、弓い～？　あ、ホンマや!!　弓あるやん!!　しかも、矢筒も完備されとるし……」
どうやら、金髪男は弓を所持していることを知らなかったらしい。
腰から提げていた弓を構えた金髪男は、矢を番えてドルマゲスに狙いを定める。
「でも、俺。ゲームでもノーコンやぞ!!」
「大丈夫や！　攻城戦の頃からは確実に腕前上がっとる！　フレンドリーファイアなんて気にせず打ちまくってくれてええから!!」
こんな妙ちきりんな男共に術を破られるとは思わなかったらしいドルマゲスが歯軋りして、二人を睨めつける。完全にロックオン状態だ。
これ以上、この鼠共に好きなようにやられてはたまるかと、ドルマゲスは杖から人の背ほどありそうな紫の光球を生み出す。今にも「お遊びは終わりですよ……」とでも言いそうな悪い顔をして何やら準備してるらしいドルマゲス。
しかし、この男達だって黙って殺れるような可愛さは持っていないらしい。
金髪男が、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。
「――――言ったな。言質は取ったぞ」
先程までの高い声とは違う、地を這うような低い声が落とされたかと思えば、矢が放たれる。
彼が放った矢はやや逸れながらも、ドルマゲスの頬を掠る。青白いドルマゲスの面長に一筋の赤が入った。
瞬間、ドルマゲスの額がボコリと音を立てて血管が浮く。完全にお

怒りモードである。
「……貴方達、もう容赦はしませんよ……！　喰らえ！　茨に呑まれて生涯此処で物置となっておしまい!!」
紫の光がパチンと弾けた瞬間、幾重にも巻き付いている茨のボールが出現する。それが、ぱかりと口を開いた。
あれに飲み込まれたら、ひとたまりもないだろうと判断したフードの男は即座に後方を振り返る。そして、サーベルトに向かって声を飛ばした。
「お、おい……！　そこの人!!　アンタもその剣で戦ってくれや!!　アレは、俺だけで止められへん……！」
「あ、ああ。だが、私は剣が抜けな……！」
サーベルトの手元でガチャガチャと鳴り響いていた銅の剣と鞘が、この時すっと分離した。あんなに頑なに鞘から離れなかった銅の剣が何故か、いとも簡単に引き抜けたのだ。
これにはサーベルトも目をまん丸にして、銅剣の柄に目を落とす。
「な、何故……!?　いや、今はよそう。それよりも、あの禍々しい賊を討たねば」
サーベルトは謎を解くのは後にすることにして、フード男の隣に急ぐ。
「相手が何人になろうとも関係ありませんよ。私とこの杖の前では――！」
ドルマゲスが赤く目を光らせながら、杖を振り上げる。すると、茨の球体がスタートの合図を聞いたとばかりに三人に襲いかかった。
フードの男とサーベルトは目配せをしたか思えば、左右に分かれて一文字に茨の口端から薙いだ剣で切り込みを入れる。
「「うぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!」」
勇ましい二人の雄叫びがこの場いっぱいに木霊した。
彼等は走る力を利用して、球体の横っ腹を通り尾まで切込みを入れて真っ二つにしたかと思えば、その先にいるドルマゲスに向かって矢が三本飛んでくる。
金髪男が虎視眈々とドルマゲスの隙を狙っていたのだ。二人にド

ルマゲスの注意が向いている瞬間を上手く突いた金髪男の攻撃にドルマゲスも「そんな、馬鹿な……！」と目を見開く。頭の弱そうな会話をしていた割には、意外と狡猾な戦法をとる。
「くっ……！」
出会ったばかりなのに上手く連携を取り、茨の球体を解体した二人にドルマゲスが茶々を入れるべく魔力を貯めていた時に、金髪男が放った矢が迫ってきたのだ。
ドルマゲスは腹と首に向かってる分は杖で払い除けたが、最後の矢が右目に命中した。
「ぐあああああ!!」
矢の刺さった右目を抑えて、断末魔を上げるドルマゲスに呼応するように見開かれた茨の球体が主を守ろうと一反木綿状態になりながら、最後の特攻をしかけてくる。
「二人は下がって！」
真っ直ぐと三人に突っ込んでくる茨の一反木綿を前にして、サーベルトが二人を守るように前面に出る。
「に、兄ちゃん、危ないで！」
金髪男が下がるように声を掛けてくるが、サーベルトも無策で前面に立った訳では無い。
彼は、小さく呪文を唱える。
妹には劣ってしまうが、この危機を打開するぐらいのことは出来る筈だ。
サーベルトの手元に出現したのは、火の球体。若干、不規則な形を取りながらも徐々に大きなっていく火の塊にフード男が「マジか……！」と絶句している。
きっと、サーベルトが戦士の格好をしているから呪文はからっきしだと思われているのだろう。アルバート一族は、古来より魔法が得意なのだ。その血を引くサーベルトも実は、ゼシカと同じ魔法使いの卵だったりする。
『メラミ！』
火の玉がくす玉程の大きさになったら、サーベルトはそれを突っ込

んでくる茨の一反木綿へと放つ。
後ろに控えるドルマゲスのために、躱す気などさらさらないらしいその魔物はサーベルトの放ったメラミをまともに受けて、全身が魔法の火に包まれる。
だが、火に包まれても三人に突っ込むのをやめない茨の一反木綿。どうやら、死なば諸共とでも考えているらしい。
魔物と心中なんてこちらから願い下げだ。サーベルトとフード男がそれぞれ剣を構え、金髪男が何度も矢を放ち魔物の体を穿つ。
さぁ、最後の大勝負と洒落こもう。そんな声が誰からともなく聞こえてくる中、サーベルトのほんの目の前で魔物は灰塵と化した。
二人に触れる前に炎に包まれて魔物が灰塵となったため、その先で今しがた矢を目から引き抜いたドルマゲスの片目とそれぞれ目が合う。金髪男が射抜いた彼の右目は伏せられており、血の涙が頬を伝っていた。
「ゆ、許しませんよ……この仕打ち。この身に、この器に、傷をつけたことを生涯恨みます」
それはそれは憎々しげに金髪男だけを凝視して言うドルマゲスに、金髪男は「ああん？」と何処までも喧嘩腰で対応する。
「そっちから仕掛けたんとちゃうんけ？　こっちはそれにやり返しただけや！　見当違いな逆恨みは止めてくれへんか!!」
両肩を怒らせて、「もう一個の目も同じようにしたろか！」と金髪男は矢を番える。とことん容赦の無い男である。
だが、ドルマゲスはそんな喧嘩腰の金髪男と対峙しても、ニヒルに笑う。ニタリと口が裂けそうな程に笑う彼は、「くくくくく……くくくくく」と不気味に喉で磨り潰した笑い声を周囲に響かせた。
「絶対に、この恨みを晴らします……。また会いに来ますよ――――コネシマ」
「な、な、なんでシッマの名前を、知ってんねん!!」
刹那、ドルマゲスの全身がぐにゃりと歪んだかと思えば、忽ちにして彼は姿を消してしまった。まるで、本物の道化師のように手品によって掻き消えてしまった脅威。

「な、なんだったんだ……あの男は――――」
ドルマゲスが居なくなったことで、最上階の空気がいつもの清浄なものに戻っている。何処かにドルマゲスが潜んでいるということは、恐らくこの空間からして無いだろう。
賊はとうとう逃がしてしまったが、漸く人心地ついたということもあって、サーベルトは剣を支えにして落ちそうになる両足を踏ん張る。
あまりにも怪奇で、人外じみていて――――人生で一番、死の足跡に怯えた時間だった。リーザス村の長閑な空気に親しんでいたサーベルトには、あまりにも刺激が強すぎた。
そんなぶるぶる武者震いするサーベルトの両肩に、ポンと誰かの手が置かれる。サーベルトは、情けなくとも両肩をぶるりと震わせて両肩の先を見た。
サーベルトの両肩に置かれている手の先には、金髪男とフード男の顔があった。二人は、サーベルトにぎこちない笑みを見せている。
サーベルトはドルマゲスとは違う種類の禍々しい笑みに、ひっと悲鳴を上げた。
彼等なりに敵意のないことを知らせようと頑張って慣れない愛想笑いを作ったようだが、それが逆効果になっていることまでは察せなかったようだ。
「なぁ、君。結局、ここどこなん？」
「こ、此処はリーザス塔だ」
「リーザス？　名前的に欧米か……？」
「お、おうべい？」
「多分ちゃうやろ。さっきのキショい男やこの兄ちゃんの火の玉から考えて、此処は俺らの知ってる地球とは違うわ。多分、大先生が主役のあの漫画的な感じの異世界とちゃうか」
「あー……お前が王様（笑）の奴な」
「先ずは、状況を知るべきやな。そのためには――――」
サーベルトに向けられた二人のぎこちない笑みが更に深まる。よって、もっと禍々しいものになっており、サーベルトは今にでも逃

げ出したい心境になる。
が、悲しいことにサーベルトの両肩に置かれている両人の手がビクともしないので、彼は逃げることすら出来ないのであった。